

# 「だけ」と‘만’に見られる用法変化の日韓対照研究

## —記述研究—

新井保裕

東京大学

### 1. はじめに

現代日本語の「だけ」と現代韓国語‘만’は下記(1)~(4)のように助詞として【程度】、【限定】の用法を備えるという点で共時的に共通しているばかりではなく、その歴史的な用法変化は共に【程度】から【限定】へと意味拡張を起こしており、通時的に見ても共通点が見られる。<sup>1)</sup>

(1) 欲しいだけもって行っていいんですよ。【程度】

(日本語記述文法研究会編 2009: 53)

(2) 1章だけ読んだ。【限定】

(日本語記述文法研究会編 2009: 46)

(3) 청군이 백군만 못하다. 【程度】

(문병열 2009: 143)

(4) 나는 너만 좋아해. 【限定】

(문병열 2009: 143)

このように共通点の多い「だけ」と‘만’であるが、一方で異なる点も少なくない。例えば(5)のように、「だけ」は事態を限定し、助動詞「だ」と結びつき、<sup>2)</sup>肯定的な【認識態度】を表す助動詞の「だけだ」として機能し得るが(近藤他 2012: 119)、「만」にそのような用法は見られない。<sup>3)</sup>

(5) すべきことはみんなした。あとは結果を待つだけだ。【認識態度】

(近藤他 2012: 119)

(5') ... 나머지는 결과를 \*기다릴 만이다/??기다리기 만하다.

(【認識態度】を表す場合)

またそれとは対照的に「だけ」には見られない‘만’の用法も存在する。(6)のように、指示詞‘그’に‘만’が後接した‘그만’は後行事態に対する話者の否定的な【認識態度】を表すが、「だけ」はそうした用いられ方はされない。

(6) 오랜 병 끝에 그만 세상을 뜨고 말았다. 【認識態度】

(이기갑 2009: 48)

(6') \*長い闘病の末、それだけこの世から旅立ってしまった。【認識態度】

このように、「だけ」、「만」共に【認識態度】を表す用法を獲得しつつあることがわかるが、その表現形式が異なるだけではなく、意味内容も前者は肯定的な【認識態度】、後者は否定的な【認識態度】と大きく異なり、「だけ」と「만」には相違点も多いことがわかる。そこで本稿では、主に先行研究を引用しながら、「だけ」と「만」の用法の鳥瞰を試み、記述研究の観点から整理していく。

## 2. 先行研究

まず本節では「だけ」、「만」に関する先行研究を概観する。

### 2. 1. 「だけ」の先行研究

日本語の「だけ」はこれまで主に、【限定】用法を備えたとりたて助詞として注目を集めている。4) 沼田(1986, 2000, 2009) や趙愛淑(2006), 澤田(2007)等の一連の研究は「だけ」を始めとする、とりたて助詞全般を分析したものとして知られる。しかし研究目的の関係上、【限定】のとりたて助詞としての「だけ」に焦点が当てられ、【程度】を始めとする他の用法との関連性への言及は少ないか、あるいは皆無である。

こうした研究とは対照的に、丹羽(1992)は「だけ」のとりたて(【限定】)用法のみを扱うのではなく、【限定】用法と【程度】用法の連続性について言及しており、両者の共時的関連性がわかる。また宮地(2010)は歴史資料を対象に、名詞の形式化・文法化の観点から「だけ」の歴史的変化について考察し、「だけ」が「長さ」に留まらない分量・尺度一般から、【程度】用法、そして【限定】用法を獲得していく通時的変遷を明らかにしている。5)

このように丹羽(1992)や宮地(2010)は「だけ」の【限定】用法を扱うだけに留まらず、【程度】用法との関連性について、それぞれ共時的、通時的な立場から述べられている。しかし前節で見たように、日本語の「だけ」は【認識態度】を表す用法も獲得しつつあり、「だけ」の用法は【限定】と【程度】に限られない。別用法にも目を向けない限り、「だけ」の全体的用法を明らかににはできない。

### 2. 2. 「만」の先行研究

続いて韓国語の「만」に関する先行研究を見ていく。洪思満(1979)は【限定】を表す現代語「만」を意味論の観点から意味機能分析している。しかし先に扱った日本のとりたて助詞に関する研究と同様に、研究目的上、【限定】用法のみを扱っており、【程度】など他用法との関連性についての言及は少ない。

一方、洪思満(1973)は「만」の意味機能の変化を、中世語・近世語の歴史資

料を用いて分析した。その中で‘만’の【程度】用法と【限定】用法の関連性について触れているが、現代語の‘만’は日本語の「だけ」同様、更なる用法を獲得しつつあり、別用法に注目する必要がある。<sup>6)</sup>

### 2. 3. 「だけ」と‘만’を対照した先行研究

最後に「だけ」と‘만’を対照した先行研究を見る。洪思満(1983)は、洪思満(1979)をもとに「だけ」と‘만’の【限定】用法を対照研究した。しかし大部分の記述が韓国語‘만’に関するものであり、正当な対照研究と呼べるかは甚だ疑問である。またやはり研究目的上、【限定】用法にしか触れられていない。また李吉遠他(2000)では「だけ」、‘만’ばかりでなく「ばかり」、‘뿐’と対照しているが、前接形式の異同が重点的に扱われている上、やはり分析対象用法が【限定】に限られている。

これら二研究とは異なり、김지현(2011)は「だけ」と‘만’を対照するだけでなく、【限定】用法と【程度】用法の連続性にも言及しており注目に値する。<sup>7)</sup>ただし共時的な助詞用法の対照に留まり、【程度】、【限定】以外の【認識態度】を始めとする他の用法変化には共時的、通時的にも分析されていない。

以上の先行研究の問題点を踏まえた上で、本稿では「だけ」と‘만’の対照研究を行う。「だけ」と‘만’の用法を【程度】、【限定】に留まらず総合的に整理し、記述する。そして両表現の用法間の関連性や日韓の異同を明らかにするため、用法変化の日韓対照研究を行っていく。

### 3. 「だけ」の用法変化

本節より先では、それぞれ先行研究の引用を中心に行いながら、「だけ」と‘만’の用法変化について見ていく。まず本節では「だけ」の用法変化を扱うが、「だけ」の辞書的記述は以下の通りである。

#### (7) だけ【丈】

〔副詞〕体言または活用語の連体形を受ける。

- ①(「たけ」とも) 程度・限度を表わす。…ほど。…限り。
- ②(①のうち、特に) それ相応に、…にふさわしく、…にふさわしい程度に、の意を表わす。→だけに
- ③それと限る意を表わす。

〔日本国語大辞典第二版編集委員会他編 2000-2002: 866〕

①と②が【程度】用法、③が【限定】用法に該当すると考えられるが、辞書においても【程度】用法と【限定】用法に限られている。また品詞は副詞

として範疇化されている。しかし繰り返し述べているように、この辞書的記述は「だけ」の一側面を表しているに過ぎない。先行研究で扱われた通時的、共時的資料を手がかりに、「だけ」の用法、用法変化を総合的に見る。

### 3. 1. 中世語

まず本項では「だけ」の中世語における用法を見ていく。「だけ」は名詞「丈」に由来し、中古では「たけ～尺なり」、「たけ、形容詞述語」の形を典型に主に人間の背丈や髪の高さを表す完全名詞であったという（宮地 2010: 425）。<sup>8)</sup>(8), (9)がその一例である。

(8) たけは～尺

[宇津保物語] (宮地 2003: 182)

(9) 年にもあはず、丈たかく心かしこし。

[正法眼蔵随聞記] (宮地 2010: 425)

ただし中古からも形式化が見られ、その一様相として、「思いの丈」、「心の丈」、「恨みの丈」といった、心情の大きさというべき抽象的な意味を示す用例が挙げられる（宮地 2010: 425）。(10)のように、「心中」といった修飾語による、あるいは趣あるべき和歌・人物といった特定の対象に対してのみ成立するメタファーと位置付けられ、名詞一般に生じ得る意味拡張と言える（宮地 2010: 426）。<sup>9)</sup>こうした形式化から「だけ」は【概数量】の用法を獲得し始めたと考えられる。

(10) 先達ノ心中ノたけ、今ノ学人モ可思、莫忘。【概数量】

[正法眼蔵随聞記] (宮地 2010: 426)

背丈以外の「高さ」を言う場合、(11)の「ゐ丈」のように、動詞の連用形と共に複合語が作られる（宮地 2010: 426）。

(11) 御髪は、ゐ丈にていとけ高う清らなり。【概数量】

[宇津保物語] (宮地 2010: 426)

さらに中世の「丈」の形式化を形態面で示す用例として、(12)に見られるような「弓丈」、「柏丈」など長さの基準を示す名詞（相当連体句）との複合語が挙げられる。これらは「N(の)丈」という形で意味を限定している（宮地 2010: 426）。

(12) 六野太をつかうで弓だけばかりなげのけられたりゆんだけ。【概数量】



宮地(2006: 426)によれば中世では、もう一点形式化を示す例を指摘できるという。それが11・12世紀の文献以降中世にかけて観察できる「丈なる」という述語用法であり、「たけ」の意味上の抽象化が促進した形として、「たけ」の叙述名詞化と位置付けられる(宮地 2010: 426)。その一例を(13)に挙げる。

- (13) 六十三になるけるまゝに、よき丈な山伏にてぞ有ける。【概数量】  
[義経記] (宮地 2010: 427)

### 3. 2. 近世語

ここまで中世における「だけ」の変化を見、「だけ」が【概数量】を表す用法を獲得していく過程を見た。なお前述の形態上の形式化、意味上の抽象化は、近世に促進され、尺度としての一般化、値名詞化につながる(宮地 2010: 428)。

また宮地(2010: 428)によれば、やはり中心は(14)にある「首だけ」など人間の体の中で高さの基準となる名詞であり、“人間とその身近なものの高さ・長さ”という“制約”は保持されているが、近世のこのタイプの用例は拡張的であるという。特に足下から首までを意味する「首だけ」は連用句・述語に立って【程度】用法を示すが、のちに副詞「首だけ」として語彙項目化する前段階を示すと同時に、「名詞+だけ」句一般の【程度】用法につながることも述べている。【程度】が大であったり、「名詞+だけ」句が述語に置かれると、文献上<限度>と解釈されやすく。【限定】解釈に限りなく近づいていく(宮地 2010: 428)。

- (14) 加様に男の方から首たけにはまつて居る成ば【程度】  
[ひとりね] (宮地 2010:428)

「動詞連用形+たけ」の造語法は「名詞+だけ」とは異なり、近世初期までには生産性が衰えたが、この造語法で唯一新出するのが「ありたけ」「なりたけ」であり、特に「ありたけ」が隆盛となるが「丈」の変化において大いに注目できる(宮地 2010: 429)。「ありたけ」が用いられる例として(15)が挙げられる。

- (15) ありたけの道具を渡。【程度】  
[新色五卷書] (宮地 2010: 429)

宮地(2010: 433)によれば「名詞+だけ」の前接名詞の拡大は元禄初期から見られ、形式上でも意味上でも現代語の【理由】用法に連なるといふ。(16)は「馴染」という名詞に「だけ」が後続した例であるが、「馴染だから」と【理由】を表している。

- (16) さりながらそれを馴染だけに御恕しあれかし。【理由】  
[好色万金丹] (宮地 2010:432)

また時を同じくして(17)のような「動詞連体形+だけ」を始めとする「連体句+だけ」の【程度】を表す用法が出現する。

- (17) こらへるたけと包めども咽びふくろび泣きみたり。【程度】  
[けいせい反魂香] (宮地 2010: 433)

### 3. 3. 近世語～近代語

ここまで中世語、近世語における「だけ」の用法を見てきたが、近代語になると(18)に見られるような【限定】用法が優勢になる。さらに格助詞に後接した例が見出されるようになり、これは統語上、事態レベルの【限定】要素の振る舞いであり、「だけ」の【限定】用法の確立定着を承けた「とりたて助詞」体系への参与一助詞化—を示すものと言える (宮地 2010: 436)。格助詞に後接した例として(19)が挙げられる。

- (18) …けど今日ではいちいち記しているのは邪魔臭いよって、みな活版ずりでそのたんび月日と名宛だけ記き入れてあげてるのや【限定】  
[滑稽曾呂利叢話] (宮地 2003: 186)
- (19) 「えーまい、食わ、食わせへんさかい、けども、食うとだけ言うてもらえんか。」【限定】  
[二代目桂春団治「十三夜」『青菜』] (宮地 2010: 436)

ここまで宮地(2010)をもとに、中世語から近代語に至るまでの「だけ」の用法変化を見てきた。その内容をまとめたものが以下の表である。「だけ」は「丈」という完全名詞から、形態上の形式化、意味上の抽象化を経て、形式名詞化した。また用法としては「長さ」を表す意味から、【概数量】、【程度】、【理由】、【限定】を次第に獲得していったことがわかる。

中世語	近世語	近世語～近代語
形式化①—1…メタファー による意味的な抽象化	形式化の促進…準備段階	【限定】用法の拡大, とりたて助詞化へ
形式化①—2…複合名詞	形式化②—2の促進…「あ りたけ」	
形式化①—3…意味の限定 [N(の)文]	形式化①—3・4の促進… 名詞ダケダ文へ	
形式化①—4…叙述名詞化	Vダケの拡張	
【概数量】	【程度】(～【理由】【限定])	【限定】

表1 近代語以前の「だけ」の用法変化(宮地 2010 をもとに筆者が作成)

### 3. 4. 現代語

続いて現代語に見られる「だけ」の用法を見ていく。1節でも触れたように、現代語の「だけ」は【概数量】や【程度】、【限定】以外にも【認識態度】など別の様々な用法を備える。ここではその用法を具体的に確認する。

#### 3. 4. 1. 【概数量】、【程度】、【限定】

辞書的記述で確認したように、現代語の「だけ」は以下の様な【程度】、【限定】用法を備える。

(1) 欲しいだけもって行っていいんですよ。【程度】

[再掲](日本語記述文法研究会編 2009: 53)

(2) 1章だけ読んだ。【限定】

[再掲](日本語記述文法研究会編 2009: 46)

【限定】を表す「だけ」は先行研究でとりたて助詞として扱われているものだが、奥津(1986)は【程度】を表す「だけ」を形式副詞と考えている。「だけ」を通時的に分析した場合、完全名詞から形式名詞化したことは宮地(2010)からも明らかになっているが、その後、「連体句+だけ」が名詞としてではなく副詞として優勢的に用いられたことにより、副詞的側面を強調した文法範疇化と言えよう。奥津(1986: 69)では、「だけ」は「ほど」と置き換えられず、非常の【程度】ではなく、むしろ最高の【程度】、上限を示すと述べられ、「かぎり」と置き換え可能であることが示されている。下記例を参照されたい。

(1') 欲しいだけ/\*ほど/\*かぎりもって行っていいんですよ。【程度】

また「文」に由来する「だけ」の元来の意味用法である【概数量】は現代

語にも存在する。現代語では「背丈」など一部の複合名詞を除いて、「名詞＋だけ」、「連用形＋だけ」は見られず、(20)の例からも明らかであるように他の用法と同様に【概数量】も「連体句＋だけ」で表される。

(20) 硬貨は…，片手で握れただけが賞金としてもらえた。【概数量】

(沼田 2009: 93)

### 3. 4. 2. 【理由】，【評価】

しかし現代語における「だけ」の用法は、語源に由来する【概数量】や、辞書に記載されている【程度】，【限定】だけには留まらない。3. 2で近世語を扱った際に、「名詞＋だけ」が現代語の【理由】用法に連なると述べたが、現代語では「だけ」の多くが特定の表現形式に結びついて、以下のように【理由】を表す。

(21) 今後は大きい取引も控えているだけに，慎重な対応が必要だ。【理由】

(22) 5年間も留学していただけあって，佐藤の英語力はたいしたものだ。

【理由】【評価】

(23) 鈴木は持久力に優れている。さすが元陸上選手だけのことはある。【理由】【評価】

(以上，日本語記述文法研究会編 2009: 53)

「だけ」に助詞「に」が後続した「だけに」構文を扱った先行研究としては寺村(1991)，益岡(2011)が挙げられる。寺村(1991)では「だけに」構文を以下のように述べている。

(24) XガPダケニ，YガQ

この型の文の言いたいことの重点は、「YについてQ」というところにあるのだが、そのことについて聞き手の共感を得るために、「XがP」という、聞き手にとって既知の事実をもってき、「XがPなら、YがQなのは当然だ」と論理的な道筋で聞き手を納得させようとするものである。その「論理」というのは、つまり社会的な常識ということである。このような構造を話し手にとらせる動機は、「YについてQ」ということに、とくに自分が感心したとか、つよく訴えたいことがあるとかいったことである。(寺村 1991: 172)

この寺村(1991)の説明に(21)の例文を照らし合わせて考えると、「今後は大きい取引が控えているならば、慎重な対応が必要なのは当然だ」と社会的な常識に基づいた論理で聞き手を納得させている。「慎重な対応が必要」だ



から「慎重に対応するように」訴えているのだろう。「だけに」構文に対するこの寺村(1991)の説明に異論はないが、一方で、なぜ「だけに」にこうした【理由】を表す用法があるのかは明らかにされていない。

一方で、益岡(2011)は「だけ」から派生し共に【理由】を表す「だけに」「だけあって」構文に注目し、両者の分化を見た。まず「だけに」構文については、「だけ」のスケール性(程度性)の特徴を反映して、「だけに」構文の意味には事態のスケール性に基づく前件と後件の比例関係が関与すると述べた(益岡 2011: 5)。つまり、「だけに」の【理由】用法は「だけ」の【程度】用法から派生したものである。

また事態間の比例関係にスケール測定がかかわることから、「だけに」構文において評価を表す方法が生じるという。(益岡 2011: 5)ただし「だけに」構文に現れる評価性は論理的な必然性があるといった性格のものではなく、事態のスケール測定という側面から語用論的に派生するものに留まる(益岡 2011: 6)。そのため評価を言明するためには下記(25)のように評価を表す副詞「さすがに」を共起させなければならない。

(25) さすがに郷土史をやっているらしいだけに詳しいですね。【理由】  
【評価】

[松本清張『陸行水行』](益岡 2011: 5)

一方、益岡(2011)は「だけあって」構文と「だけに」構文を比較し、「だけあって」構文に固有の特徴を挙げるとすれば、当該の事態を積極的に評価するという意味特性の存在がそれであると述べた(益岡 2011: 6)。益岡(2011)は「だけあって」構文は以下の派生を経て発生したものであると述べている。

(26) 「ダケノコトハアル」(文末) → 「ダケノコトハアッテ」(接続)  
→ 「ダケアッテ」

「だけあって」の原型である「だけのことはある」について、益岡(2011)では次のように述べられている。

(27) Xダケノコトハアル

「Xというスケール(ダケ)の事態(コト)が存在する(アル)」ことを助詞「ハ」で取り立てる内容となる。「～ガ+アル」が存在を表す構文の基本であるということからすれば、「ダケノコトハアル」について特筆すべきは「ハ」の存在である。助詞「ハ」は、対象群の中からある対象を特立する働きを持つ。(益岡 2011: 7)



先に紹介した(23)の場合、「元陸上選手というスケールの事態が存在すること」を特立しており、元陸上選手は、一般的に持久力というスケールが大きいと考えられるため、鈴木が持久力に優れている【理由】を述べている。

(23) 鈴木は持久力に優れている。さすが元陸上選手だけのことはある。【理由】【評価】

[再掲] (日本語記述文法研究会編 2009: 53)

こうした「だけのことはある」は接続の形を経て、「だけあって」という形式に変化し、定着するが、「だけあって」構文について益岡(2011)は次のように説明している。

(28) XハPダケアッテQ

<主題 X がかかわる P (従属節の事態) と Q (主節の事態) を因果的に関係づけることを通して X を評価する>という構文レベルの意味を実現させる。(益岡 2011: 9) ここでは、事態に対する評価ということ以上に、主題に掲げられた対象に対する評価ということが重要な意味を持つ。構文全体の特性として、いわば「コトの評価からモノの評価へ」という評価対象の移行が観察される。(益岡 2011: 9)

前掲の(22)では、主題である佐藤の英語力を、それがかかわる5年間の留学経験と英語力がたいしたものであることを因果的に関係づけることにより、評価している。このように「だけあって」は「だけに」と異なり、「さすがに」などの評価を表す副詞がなくとも、【評価】を表すモーダルな用法を備えている。

(22) 5年間も留学していただけあって、佐藤の英語力はたいしたものだ。【理由】【評価】

[再掲] (日本語記述文法研究会編 2009: 53)

なお日本語記述文法研究会編(2008: 136)では以下の例を用いて、「だけあって」の主節にはプラス評価が多いが、「だけに」の主節には、マイナス評価も現れると述べられているが、「だけあって」の【評価】が構文に由来するため、プラス評価に偏る一方で、「だけに」の【評価】は語用論的に派生するため、文脈に応じてプラスの評価にもマイナスの評価にも成り得ると考えられる。

(29) 自分のしたことがわかっているだけに／\*だけあって，つらかった。

【理由】【評価】

(日本語記述文法研究会編 2008: 136)

ここまで「だけに」，「だけあって」の相違点について述べてきたが，最後は共通点に触れる．まず日本語記述文法学会編(2008: 135)の分析によれば，「だけに」「だけあって」の主節は，平叙文であり，行為要求や勧誘の表現は現れないという．これは(30)の例からも明らかである．

(30) \*値段が高いだけに，丁寧に扱ってください。【理由】

(日本語記述文法研究会編 2008: 135)

また「だけに」，「だけあって」の主節は，程度・状態を表す表現が現れ，多くの場合は形容詞である（日本語記述文法研究会編 2008: 135）．本目で挙げた例も(21)「必要だ」，(22)「たいした」，(25)「詳しい」という，程度・状態を表す表現である．

### 3. 4. 3. 事態の【限定】

前項で，近世語から近代語にかけて「だけ」は他の用法に比べて【限定】用法が優勢になることを述べた．宮地(2010: 436)では以下の格助詞へ後接した例を挙げ，統語上，事態レベルの【限定】要素の振る舞いが起こることから，それが「だけ」の【限定】用法の確立定着を承けた「とりたて助詞」体系への参与一助詞化一を示すものであるとした．

(19) 「えーまい、食わ、食わせへんさかい、けども、食うとだけ言うてもらえんか。」【限定】

[再掲：二代目桂春団治「十三夜」『青菜』]（宮地 2010: 436）

ただし【限定】のとりたてを受けるのは名詞や格助詞に限られていた．これが現代語になると，動詞，形容詞などの用言を限定する例が見られる．名詞のプロトタイプの意味が事物，用言のプロトタイプの意味が事態（動詞が動作，形容詞が状態）であることを考えると，【限定】の意味対象が事物中心から事態の方へも拡大していることがわかる．近藤他(2012: 117)では「だけ」に助動詞「だ」が接続した文末形式「だけだ」を対象に，それが動詞の非過去形につく「～するだけだ／しないだけだ」について考えている．

(31) 掃除した。洗濯もした。勉強もした。風呂にも入った。食事も済ませた。あとは寝るだけだ。【限定】

- (32) 彼の癖はみんなが知っている。自分が気づいていないだけだ。【限定】  
(以上, 近藤他 2012: 117)

(31), (32)はそれぞれ「～するだけだ」, 「～しないだけだ」が用いられた文である。近藤(2012: 117)によると, 「～するだけだ」はとりたて助詞「だけ」の基本的な【限定】機能を事物から事態の集合へと拡張したものであるという。<sup>10</sup>一方, 「～しないだけだ」は, ある事態の集合から1つを否定的に取り上げることで, その他の可能性を肯定するものであり, いずれの「だけ」も, 取り立て方は基本的に排他で, とりたて助詞「だけ」と同質である(近藤他 2012: 117)。(31)では話し手は自分がしなくてはならない行為のリストを見ながら, あるいはそれを頭に浮かべながら, 自分が済ませた行為を1つ1つチェックして消していくような文脈で使われると近藤(2012: 117)では述べられる。(32)の場合は, 「自分が気づいている」という事態を否定し, その他の可能性を肯定している。

#### 3. 4. 4. 【極限】

続いて文末形式「だけだ」に動詞の過去形が前接した「～しただけだ」について考える。「～しただけだ」が用いられた例文として(33)のようなものが挙げられる。

- (33) 注意しただけだ。きつく叱っただけなんてとんでもない。【極限】  
(近藤他 2012: 116)

近藤他(2012: 117-118)によると, (33)では「するだけだ」のように話し手が何らかのリストをチェックしているのではなく, 話し手が自分の行為をたいしたことはないと判断していることが伝わるという。また興味深い点として, 話し手の状態や行為の言い訳や弁明に聞こえる点を挙げている。近藤他(2012)では次のように述べられている。

ここで「だけだ」が含意するのは, 事物の集合ではなく, 事態のリストでもない。それは, 出来事の連続体である。この連続体は, 難易度や程度などの量的・質的解釈を伴う, ある種のスケールをなしている。そして, 「だけだ」が限定するのは, そのスケールの下限に位置する出来事である。スケール上で負荷の少ない, あるいは難度の低い出来事を排他的に限定することで, 同一スケール上のそれより上, つまり負荷が大きい出来事や難度が高い出来事の可能性を否定する。この種の「だけだ」が含意するスケールは, 「さえ」や「でも」に共通するものである。(近藤他 2012: 118 の一部を下線部に改変)

このように「～ただけだ」は、(34)、(35)にあるような極限のとりたて助詞である「でも」や「さえ」と同じ【極限】の用法を持つとされている。「～ただけだ」が【極限】の用法を持つにはスケール性が大きく関与しているが、これは「だけ」が語源的には「丈」に由来し、「長さ」を意味するものであったことによると考えられる。

(34) この漢字は小学生でも知っている。【極限】

(35) 空腹だったので、残飯さえおいしいと思った。【極限】

(以上、近藤他 2012: 118)

また近藤(2008: 150-151)でも、(36)と(37)の違いとして、(36)は可能性のある飲み物の集合からコーヒーを限定し他を否定する一方で、(37)はスケール含意が生じると述べている。(37)は、可能性のある朝食の中でほぼ最小限の「コーヒーを飲む」を限定し、朝食のスケール上でそれより上に位置する「トーストとコーヒー」、「卵とトーストとコーヒー」、「サラダと卵とトーストとコーヒー」などのより充実した食事の可能性を否定する。そしてこの最小限の解釈から、十分な食事をとっていない、空腹だなどの話し手の発話意図が推測されるという(近藤 2008: 150-151)。ここに話し手の発話意図というモダルな意味の萌芽が示唆されるが、それについては次項で詳しく扱う。

(36) 今朝はコーヒーだけ飲みました。【限定】

(37) 今朝はコーヒーを飲んだだけです。【極限】

(以上、近藤他 2012: 118)

### 3. 4. 5. 【認識態度】

文末形式「～ただけだ」の「だけ」は【限定】を表すとりたて助詞と同質であることは先に述べたが、その意味用法は完全に一致するものではなく、異なりが見られる。安部(1999)では、「だけだ」構文が自然であっても「名詞+だけ」が不自然な例として(38)を挙げている。

(38) 私はビールを飲んだだけだ。/?ビールだけ飲んだ。これからワインや美味しい料理がでてきてコンパも盛り上がるころなのに、急に帰らなければならないなんて、残念だ。【認識態度】

(安部 1999: 33)

安部(1999)は、名詞句に接続する「だけ」と文末に位置する「だけ」の【限



定】のあり方には異なりがあることを、「だけ」が限定する際に想定される前提集合のあり方の違いから説明した。その説明は以下の通りである。

- ①「名詞句+だけ」文における前提集合は、発話者の主観的尺度という色付けがなく、単に〈同列関係〉にある事象から構成される集合である。
- ②「ただけだ」文における前提集合は、〈発話者の主観的尺度〉に基づいて設定された、発話者の主観的色付けがなされた集合である。

(安部 1999: 45-46)

前項で、動詞の過去形に「ただけだ」が接続した「～しただけだ」構文が持つ【極限】用法には、話し手の発話意図というモーダルな意味を帯びる可能性を示唆した。本目で扱っている例文(38)も「～しただけだ」構文であり、〈発話者の主観的尺度〉が関与している。『話し手が事態をどのように主観的に認識しているか』を表す用法を【認識態度】と呼ぶと、【認識態度】用法と【極限】用法が連続していると考えることができる。この【極限】用法から【認識態度】用法への拡張は、モーダル的な意味の富化であり、【理由】から【評価】への拡張と共通している。<sup>11)</sup>

ここまで「～しただけだ」構文にのみ注目し、【認識態度】用法を見てきたが、安部(1999: 46)は「～しただけだ」構文以外の名詞述語文・形容詞術語文や慣用句的用法、直前状態的用法の「ただけだ」文も、基本的には②の「ただけだ」文と同様のタイプに分類されると考えた。その例が以下の(39)～(43)である。【認識態度】を表す「ただけだ」の前接要素は動詞の過去形に限らず、動詞の非過去形、形容詞、名詞まで含まれることがわかる。

- (39) スタメンが2軍選手ただけだ。〈名詞述語文〉
- (40) この料理は辛いただけだ。〈形容詞述語文〉
- (41) 手元にあるのは1000円ただけだ。〈分裂文〉
- (42) 収入が減ったら節約するただけだ。〈慣用句的用法〉
- (43) 料理も飲み物も準備できた。あとはお客様が来るただけだ。〈直前状態用法〉

(以上、安部 1999: 34)

ではここで表される【認識態度】とは具体的にはどのようなものであろうか。安部(1999)は、(38)～(41)では「不足感」が表されると述べた。(38)では「ビールを飲んだ」のみでは不十分であるというニュアンスが感じられる(安部 1999: 35)。(39)～(41)でも、それぞれ、「試合に対する真剣さ」、「料理を評価する材料」、「所持金」に対する「不足感」が感じられるという。<sup>12)</sup>



しかし(42), (43)ではそうした「不足感」と異なるニュアンスを伴う。(42)は「前提を満たす唯一の選択肢」, (43)は「完遂に対して不足する唯一最後の事象」を表している(安部 1999: 45)。「ただだ」構文は動詞の非過去形が接続する場合は「不足感」を表さないようである。しかし安部(1999: 45)で指摘されるように, (42)も(43)も前提集合の設定において「発話者の主観の色付け」が成されており, (38)~(41)と共通している。

近藤他(2012: 119)は以下の用例を比較することで, 「ただだ」構文では結果を待つことが肯定的に捉えられる一方で, 「しか~ない」構文では結果を待つことが悲観的に評価されていることが伝わると述べた。このように「ただだ」構文は【認識態度】という用法を備えるが, 動詞の非過去形と接続する場合は肯定的な態度, それ以外と接続する場合は「不足感」のような否定的な態度が現れるという対照的な様相を見せることがわかる。

- (5) すべきことはみんなした。あとは結果を待つただだ。【認識態度】  
[再掲] (近藤他 2012: 119)
- (44) すべきことはみんなした。あとは結果を待つしかない。【認識態度】  
(近藤他 2012: 119)

また(38)の文は, (44)のような「しか~ない」構文との置き換えが可能である。澤田(2007: 114)は, 「しか~ない」を用いる目的は, 話し手の信念世界においてある成立した事態を量化して捉え, 成立以前に話し手が期待・予測していた値に満たなかったことを表示することにあると述べた。それを踏まえると, 「しか~ない」との互換性」という特徴も「ただだ」文における前提集合が, 発話者の主観的尺度に基づいた集合であることの妥当性を示すものと考えられる。(安部 1999: 42)

- (38) 私はビールを飲んだただだ。/?ビールだけ飲んだ。これからワインや美味しい料理がでてきてコンパも盛り上がるころなのに, 急に帰らなければならないなんて, 残念だ。【認識態度】  
[再掲] (安部 1999: 33)
- (45) 私はビールしか飲んでいない。これからワインや美味しい料理がでてきてコンパも盛り上がるころなのに, 急に帰らなければならないなんて, 残念だ。【認識態度】  
(安部 1999: 33)

本目では「ただだ」構文が備える【認識態度】について概観した。前接要素により, 肯定的な態度, 否定的な態度の両方を表し得るが, モーダルな意味を備えている点には変わりなく, 前述の【極限】用法からモーダルな意味

を獲得していることがうかがえる。

### 3. 5. まとめ

本節では「だけ」の用法，用法変化を通時的，共時的観点から見てきた。その結果をまとめたものが，下記の図1である。<sup>13)</sup>

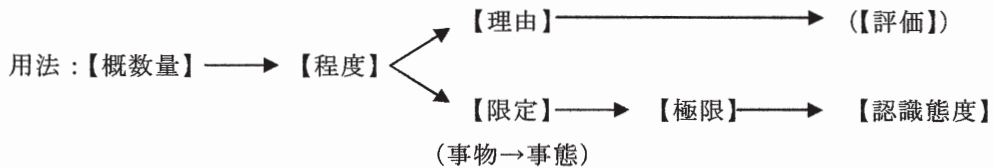


図1 日本語「だけ」の用法変化

品詞の変化から見ていくと，中世語から近代語の間に完全名詞から形式名詞あるいは形式副詞，とりたて助詞へと，語彙形態素が文法形態素へと変化していく文法化の様子が見える。そして現代語では助動詞「～だ」と結びつき，助動詞「～だけだ」として機能している。

「だけ」の語源は「丈」であり，もともとは「長さ」を表す名詞として用いられていたが，文法化により形式名詞化することで【概数量】を表す用法を獲得した。さらに意味の抽象化に伴い，【程度】の用法も備える。その後は，用法変化に分化が見られ，まず一方では「だけ」のスケール性を利用した【理由】の用法が現れる。さらにその【理由】用法は語用論的条件や特立のとりたて助詞「は」と結びつくことで，【評価】の用法を備え得る。もう一方では，「だけ」の【限定】用法が優勢となり，とりたて助詞体系への参加が見られる。「だけ」が限定する対象も事物から事態へと拡大するが，語源本来の意味である「長さ」が持つスケール性が生かされ，【極限】を表す用法が生じる。さらにそこから話者の【認識態度】を表すようになるが，前接要素により【認識態度】が肯定的か，否定的かが決定される。【理由】から【評価】，そして【極限】から【認識態度】という用法変化は，モーダルな意味の獲得という点で共通している。

ここまで日本語「だけ」の用法，用法変化を概観した。それでは，「だけ」と同様に，【程度】，【限定】の用法を備え，【程度】から【限定】という変化を見せてきた韓国語の‘만’は一体どのような様相を見せるのだろうか。次節より詳しく扱っていく。

### 4. ‘만’の用法変化

本節では‘만’の用法変化を見るが，‘만’の辞書的記述は以下のようになっている。

(46) 만

만 01 [依存名詞]

(よく ‘만에’, ‘만이다’ の形式で用いられて) 期間がいくらか続いたことを表すことば.

만 02 [依存名詞]

①前接のことばが意味する動作や行動に妥当な理由があることを表すことば.

②前接のことばが意味する動作や行動が可能であることを表すことば.

만 14 [助詞]

①別のものから制限して、あるものを限定することを表すことば.

②何かを強調する意味を表すことば.

③話者が期待する最後の善を表す補助詞.

④(‘하다’, ‘못하다’ と一緒に用いられて) 前接のことばが表す対象や内容の程度に達することを表す補助詞.

[국립국어원 2014]

‘만’は「だけ」に比べると、辞書的記述が非常に多様であり、統一的な説明は成されていないように思われる。中心的な用法だと考えられる【程度】、【限定】に限って言えば、‘만 14’④が【程度】用法、‘만 14’①、③が【限定】用法を指す。<sup>14)</sup>ただ、やはりこうした辞書的記述は、「だけ」の時と同様に‘만’の一側面を見せているに過ぎない。次項以降、先行研究で引用された通時的、共時的用例を見ていくことで、‘만’の用法、用法変化を整理していく。ただし、管見の限り、中世語より前の‘만’、あるいはその遡及形を扱った先行研究はなかったため、本稿では中世語以降を分析対象とする。また‘만’は上記辞書では助詞として分類されているが、日本語のとりたて助詞同様、他の助詞とは区別して「特殊助詞」と呼ばれることが一般的であるので本稿でも「特殊助詞」と称する。<sup>15)</sup>

4. 1. 中世語

まずは 1450~1500 年代の‘만’の用法を概観する。洪思滿(1973)では前接、後接を含めた接続要素をもとに下記の四類型に分類しているが、それぞれの類型について見ていく。

<類型 1 比較・程度表示叙述語(形容詞)が後接>

(47) 흔히 지나거나 석들만 흥거나 흥야 【程度】

[釋譜詳節]

(48) 사람이라도 증성만 묻호이다 【程度】

[月印千江之曲]

(49) 손마락만 큰 【程度】

[朴通事諺解]

(50) 일천 편 거시 흔 무저비만 마뜬니 업스니라 【程度】

[朴通事諺解]

類型 1 で見られる例(47)~(50)は‘만’に程度や比較を表す形容詞が後接する類型であり, ‘ㅎ다’, ‘몰ㅎ다’, ‘크다’, ‘굵다’などの形容詞と呼応して程度の優劣を比較したり, 状態に対する程度の同等さを表したりするもので, 現代語の比較格 ‘-만큼’, ‘-보다’と同一の意味機能を備えたものであると洪思滿(1973: 97-98)では述べられる. しかしこの指摘でも触れられているように, 比較という用法は後接する形容詞との合成によって派生するものであり, ここでの‘만’の基本的な用法は【程度】であると考えられる. <sup>16)</sup>

<類型 2 思考的叙述語 (動詞) が後接>

(51) 衆生을 프성귀만 너기느니 【程度】

[釋譜詳節]

洪思滿(1973: 98)によると (51)のような類型 2 は思考的な動詞‘너기다’を叙述語に後接させる‘만’であり現代語の‘-처럼’, ‘-같이’と同一の意味機能を備える. しかしこうした比較の用法も, あくまでも後接する‘너기다’との合成によって派生する用法であり, 「(前接要素と) 同程度に思う」ことから「(前接要素) のように思う」という意味が派生したと本稿では考え, やはり‘만’の基本的用法は【程度】であると言える.

<類型 3 時間・空間の範囲, 程度表示語下に後接>

(52) 사르든 일세만 사라잇고 【程度】

[朴通事諺解]

<類型 4 数量表示語に後接>

(53) 도티고기 원근만 사며 【程度】

[朴通事諺解] (以上, 洪思滿 1973: 96-99)

類型 3, 4 で類型 1, 2 と異なり前接要素に注目しているが, (52), (53)の例はそれぞれ【程度】を表していることがわかる.

以上のように, 洪思滿(1973)では中世語の‘만’を四類型に分類しているが, その用法はいずれも【程度】であると言える. <sup>17)</sup>

#### 4. 2. 近世語

続いて 1650~1700 年代の‘만’の用法を見る. 先の洪思滿(1973)では中世



語だけでなく、近世語も扱っており、近世語の‘만’を五類型に分類している。(54)~(59)の例文で示される類型 1~4 は前項と同じものであり、近世語の‘만’が中世語に引き続き、【程度】の用法を備えていることがわかる。

<類型 1 比較・程度表示叙述語（形容詞）が後接>

(54) 또 닷쇄만 ㅎ면 가리라 【程度】

[老乞大諺解]

(55) 가다가 中止곳 ㅎ면 안이 갈만 몬 ㅎ이라 【程度】

[海東]

(56) 일천거시 ㅎ 무들기만 길디 못ㅎ니 【程度】

[老乞大諺解]

<類型 2 思考的叙述語（動詞）が後接>

(57) ㅎ져 어듭거<sup>늘</sup> 밤중만 너길터니 【程度】

[青丘古時調]

<類型 3 時間・空間の範囲，程度表示語に後接>

(58) 우리로 ㅎ여 ㅎ룻밤만 재라 【程度】

[老乞大諺解]

<類型 4 数量表示語に後接>

(59) 물읷 슬키 ㅎ 디위만 ㅎ거든 【程度】

[老乞大諺解]

近世語になると、(60)のように数量表示語だけでなく非数量表示語にも‘만’が後接する用例が見られるようになる。中世語に見られなかったこの類型を洪思滿(1973)は類型 5 とした。(60)からも示されるように、この類型の‘만’は前接要素を【限定】する用法を備えている。

<類型 5 非数量表示語に後接>

(60) 다만 高麗자 취만 쓰고 【限定】

[老乞大諺解] (以上, 洪思滿 1973: 97-100)

前節からここまで、中世語から近世語に至る‘만’の用法変化を洪思滿(1973)の資料、分析をもとに見てきた。図表化すると以下のようなになる。この結果を踏まえ、洪思滿(1973: 101)では、「‘만’は中世語で数量の程度表示あるいは比較の程度表示の単純な程度を表す意味機能を備えた後、近世語に至って、非数量語に接続して使われるようになってから、現代語のような限定の意味機能を備えるようになった」と述べられている。日本語の「だけ」と同様に、韓国語の‘만’も【程度】から【限定】への用法拡張が起こったこ



とが確認される。

類型	前接要素	後接叙述語		用法	代用語
1		比較・程度表示 形容詞	히다	【程度】	-만큼
			몰히다		-보다
			크다		-만큼
			굵다		-만큼
2		思考表示動詞	너지다	【程度】	-처럼, -같이
3	時間・空間の 範囲程度表示語		-정도, -쯤		
4	数量表示語		-정도, -쯤		
5	非数量表示語			【限定】	-뿐

表2 中世・近世韓国語に見られる‘만’の用法  
(洪思滿 1973: 100 を一部修正)

また洪思滿(1973: 101)では, ‘만’が【限定】用法を持たなかった中世語で ‘뿐’が【限定】を表していたことを下記の例から指摘している。

(61) 소리만 듣노라【限定】

[釋譜詳節] (洪思滿 1973: 102)

さらに洪思滿(1973)は, 現代語では【限定】を表す際に‘만’が用いられる点や, 中世語で【限定】を表した‘뿐’の現代語形である‘뿐’が指定詞‘이다’と結合して‘뿐이다’の形式で主に用いられている点を指摘した上で, 【程度】, 【限定】を表す特殊助詞の歴史的変化をまとめ, 次のように述べた。

中世語においては程度と限定表示の語辭が別個に存在した事実と, 近世語に至って程度(比較)表示の‘만’は比較機能の意味表示を文脈によって存続しながら, 一方で限定表示の意味機能に浸透するようになった点, 当初, 限定表示の‘뿐’は黒線のようにその意味機能が弱化してきた現象を概観できる。(洪思滿 1973: 103)

	1450年代中世語	1650年代近世語	現代語
【程度】	만	만	만
【限定】	뿐	뿐	뿐

表3 中世語から現代語に至る【程度】, 【限定】の特殊助詞の変化

このように韓国語の‘만’も近世語になって、【限定】用法を獲得したわけであるが、洪思滿(1973)で挙げられた用例は名詞が前接したものである点に留意しなければならない。문병열(2009), 고영근(2010)では‘만’に用言の未来冠形詞形が前節した下記例が中世語に見られ、それが【限定】の意を表すことを述べている。またこの‘만’は現代語で【限定】を表す特殊助詞の‘만’の遡及形であるが、박진호(1995)では、‘만’が中世語では用言の冠形詞形が後続する依存名詞だったという見解が明らかにされている(고영근 2010: 74).<sup>18)</sup>

日本語の【限定】を表す「だけ」が、前接要素が名詞から動詞、形容詞に拡大した一方で、韓国語の【限定】用法の‘만’は前接要素が用言から名詞へと拡大しており、両者は相反した様相を見せていることがわかる。つまり韓国語の‘만’が限定する意味対象は、日本語とは対照的に事態から事物へと拡張している。しかし、品詞に注目すると‘만’は依存名詞から特殊助詞へと変化している。日本語の不完全名詞、とりたて助詞が、それぞれ韓国語の依存名詞、特殊助詞に該当することを考えれば、日本語は不完全名詞から(形式副詞を挟んで)とりたて助詞へと変化しており、両者の品詞変化は類似しているとも言える。<sup>19)</sup>

(62) 이 施主 | 오직 衆生이그에 一切 즐거븐 것 布施할 만  
    きゃど【限定】

[釋譜詳節] (문병열 2009: 150, 고영근 2010: 74)

このように中世語にも【限定】を表す‘만’の用例が散見されるが、やはり中世語における‘만’は、洪思滿(1973)で指摘されたように【程度】の意味で用いられたようである。安秉禧・李光鎬(1990)や李賢熙(1994)でも以下のよう述べられる。

補助助詞‘도’が‘역시’を表す一方で、「単独」を表す補助助詞は‘만’と‘뿐’である。従って‘도’と‘만’、‘뿐’は互いに対立した意味を表す補助助詞だと言える。しかし‘만’は「単独」の意味だけでなく「程度」を表す用例がかなり多い。(安秉禧・李光鎬 1990: 194)

形式名詞‘만’は「程度」の意味も備え、「限定、中止」の意味も備えるが、後者の意味を備える‘만’は前者の‘만’に比べ、現れるのが珍しい。おそらく後者は前者から分化したものであろう(李賢熙 1994: 349).<sup>20)</sup>

なお문병열(2009)では中世語の【限定】を表す特殊助詞として‘뿐’だけでなく‘못’を挙げ、以下の様な用例を出している。‘뿐’が用いられる(63)では個体, ‘못’が用いられる(64)で事件を【限定】の対象としているという。21)

(63) 하늘 우콰 하늘 아래 나뿐 尊호라 【限定】

[月印釋譜] (문병열 2009: 151)

(64) 生곳 이시면 老死苦惱 | ຈ느니 이<sup>는</sup> 生起相이라 【限定】

[月印釋譜] (문병열 2009: 146)

문병열(2009)でも、洪思滿(1973)と同様に現代語の‘만’の用法が中世語のそれに比べて拡張したことを指摘しているが、その理由として‘뿐’の特殊助詞としての機能が現代語に至り、極度に制限されたことの他に‘못’の消滅を挙げている (문병열 2009: 163) .

ここまで中世語から近世語に至る‘만’の用法変化を見てきた。【程度】から【限定】へと用法が拡張した点では日本語の「だけ」と共通的であるが、【限定】の意味対象は日本語と対照的に事態から事物へと拡張している点が非常に興味深い。

なお 17 世紀文献資料からは現代語に見られる、以下のような【中止】用法も見られるという。【中止】用法は次項で詳しく扱う。

(65) 설워 그만하면 시뵈라 홀 거시오 【中止】

[癸丑日記] (李賢熙 2014: 10)

#### 4. 3. 現代語

続いて現代語における‘만’の用法を概観する。現代語の‘만’の用法は【程度】、【限定】、【中止】に留まらず、1 節で触れたような【認識態度】の他、様々なものがある。そうした用法を、先行研究をもとに確認していく。

##### 4. 3. 1. 【程度】

まず中世語、近世語で見られた【程度】用法を考える。本節冒頭で紹介した辞書的記述でも確認されたように、この用法は現代語の‘만’で最も基本的な用法の一つである。以下で例を挙げる。

(3) 청군이 백군만 못하다. 【程度】

[再掲] (문병열 2009: 143)

(3)では「青軍が白軍ほどには及ばない」という【程度】が表されている。

この用法が中世語, 近世語にも見られたことは前述の通りではあるが, 現代語では別の‘만’にも【程度】を表すと考えられる部分が存在する。

ここまで扱ってきた‘만’は主に特殊助詞としてのものであったが, ここで一度, 依存名詞としての‘만’に注目する. 依存名詞‘만’の辞書的記述を改めて確認すると次の通りである.

(66) 依存名詞‘만’

만 01 [依存名詞]

((よく ‘만에’, ‘만이다’ の形式で用いられて)) 期間がいくらか続いたことを表すことば.

만 02 [依存名詞]

①前接のことばが意味する動作や行動に妥当な理由があることを表すことば.

②前接のことばが意味する動作や行動が可能であることを表すことば.  
[再掲, 국립국어원 2014]

‘만 01’の具体例として, (67), (68)が挙げられるが, それぞれ「二時間」, 「三年」という期間を表している. 期間はスケール性を備えるものであり, これも特殊助詞‘만’の一用法と同様に【程度】と考えて問題なさそうである.

(67) 친구가 도착한 지 두 시간 만에 떠났다. 【程度】

(68) 그 때 이후 삼 년 만이다. 【程度】

[以上, 국립국어원 2014]

次に‘만 02’の具体例を見る. (69), (70)はそれぞれ用言‘내다’, ‘살다’の未来冠形詞形に‘만’が付き, 「怒るのももっともだ」, 「知らないふりして過ごすことができる」という意味を表すが, 共に未来冠形詞形が前接する他に, 【添加】を表す特殊助詞‘도’を挟んで, ‘하다’が後接する点に注意しなければならぬ. そこで‘만하다’の辞書的記述を見てみる.

(69) 그가 화를 낼 만도 하다. 【程度】

(70) 그냥 모르는 척 살 만도 한데 말이야. 【程度】

[以上, 국립국어원 2014]

(71) 만-하다 [補助形容詞]

(用言の後ろで‘-을 만하다’の構成で用いられて)

①ある対象が, 前接のことばが意味する行動をする妥当な理由を持つ程度に価値があることを表すことば.



②前接のことばが意味する行動をするのが可能であることを表すことば。  
[以上, 국립국어원 2014]

‘만하다’を用いた用例として以下のものが挙げられる。(72)が①, (73)が②の用例である。(72)では「刮目するのに妥当な理由を持つ程度に価値があるほどに成長を成し遂げた」という意味であるが, 辞書の説明にもあるように【理由】の根拠となる【程度】が表されている。先の(69)も「怒るのに妥当な理由を持つ程度だ」という意を備えており, 共に【程度】用法の一種と考えて問題ない。<sup>22)</sup>

一方, (73)は『『彼を止められる』力がない』という解釈になり, 可能用法で‘만하다’が用いられていると국립국어원(2014)では述べられる。この可能用法も「行動をする程度に行動主体に相応の価値があるため, その行動が可能である」ことから【程度】用法から派生した二次的なものであると考えられる。(73)の日本語訳である(73')からも確認されるように, 【程度】用法で表せられることから, 別途, 可能用法を設ける必要はないと思われる。特に(73)で可能用法が強く感じられるのは, ‘만하다’の現在冠形詞形に後続した‘힘’が能力を表す名詞であるためではないかと推測される。(70)では能力を表す表現が文中に用いられているわけではないが, やはり上記の論理から【程度】から可能用法が派生している。<sup>23)</sup>

(72) 1년 동안 괄목할 만한 성장을 이루었다. 【程度】

(73) 내겐 그를 저지할 만한 힘이 없다. 【程度】

[以上, 국립국어원 2014]

(73') 私には彼を止めるだけの力がない。／彼を止められる力がない。

以上より, 特殊助詞だけではなく依存名詞の‘만’も【程度】の用法を備えていることがわかる。なお前項までで歴史的変化を見てきた際に, 依存名詞‘만’が【限定】用法を表す例を中心に見てきたが, 【程度】用法については, その用例数はかなり少ない。<sup>24)</sup>依存名詞‘만’は現代語では, 【限定】だけでなく【程度】の用法としても多く用いられるようになり, ‘만’の用法拡張は, 【程度】から【限定】という異なる用法間だけでなく, 同じ【程度】という用法内でも起こっていることが示唆される。

また現代語では‘만’から派生した‘만큼’も程度を表す表現として用いられる。‘만큼’の辞書的記述を記述を見ると以下の通りである。なお同義の表現‘만치’については省略する。

(74) 만큼 (≒만치)

01 [依存名詞]



- ① (主に語尾‘-은, 는, 을’の後に用いられて) 前接の内容に相当する数量や程度であることを表すことば。
- ② (主に語尾‘-은, 는, 을’の後に用いられて) 後接の内容の原因や根拠になることを表すことば。

## 02 [助詞]

(体言や助詞の直後について) 前のことばと類似した程度や限度であることを表すことば。

[국립국어원 2014]

‘만큼’には依存名詞, 特殊助詞があるが, 辞書的記述からも両者に【程度】用法があることが確認される. 依存名詞‘만큼’②は【理由】用法を備えるが, ここではまず【程度】のみを扱う. 依存名詞①, 特殊助詞の例はそれぞれ(75), (76)で示される. (75)は「努力をした分に相当する程度の対価を得る」, (76)は「宮闕と同程度に大きく家を建てる」という意味であり, 【程度】が表されている.<sup>25)</sup>

(75) 노력한 만큼 대가를 얻다. 【程度】

(76) 집을 대궐만큼 크게 짓다. 【程度】

[以上, 국립국어원 2014]

ここまで現代語‘만’の【程度】用法を概観した. 特殊助詞の‘만’だけでなく依存名詞‘만큼’や‘만하다’も分析の対象とすることで, ‘만’が中世語, 近世語と同様に【程度】の用法で用いられていること, そしてその【程度】用法はその形式, 前接要素共に拡大していることがわかる.

### 4. 3. 2. 【理由】

前目で, ‘만하다’で表す【程度】が根拠となり【理由】を表すこと, 依存名詞‘만큼’が【程度】用法だけでなく【理由】を表すことを示した. 現代語の‘만큼’はこのように【理由】の用法も備えている. (77)がその例である.

(77) 어른이 심하게 다그친 만큼 그의 행동도 달려져 있었다. 【理由】

[국립국어원 2014]

先に, 主に益岡(2011)を引用しながら, 現代日本語「だけ」が【理由】用法を備えることを述べたが, 現代韓国語の‘만큼’も同様である. 益岡(2011: 5)は日本語「だけに」構文について, 「だけ」のスケール性(程度性)の特徴を反映して, 「だけに」構文の意味には事態のスケール性に基づく前件と後件の比例関係が関与すると述べた. 「だけ」の【程度】用法から【理由】

用法が派生したと考えるわけだが、同じように【程度】用法を持つ韓国語の‘만’にも同様の論理が働き、【理由】用法を獲得するようになったと推測される。26)

#### 4. 3. 3. 【限定】

ここで再び‘만’の基本的用法に戻る。近世語になり‘만’が本格的に獲得した【限定】という用法は現代語においても基本的な用法である。その例として(4)を挙げる。

(4) 나는 너만 좋아해. 【限定】

[再掲] (문병열 2009: 143)

洪思満(1979)では‘만’の意味分析を行い、六つの意味を挙げたが、そのうち【限定】と関連すると見られるものは以下の五つである。

<「唯一」であることを「限定」>

(78) 얼굴만(/얼굴 하나만) 예쁘다고 배우가 되는 것이 아니다. 【限定】  
(洪思満 1979: 24)

<数量詞についてその程度を最低に縮小「制限」>

(79) 한 마디만 더 얘기하고 싶다. 【限定】  
(洪思満 1979: 30)

<用言の語形分割で「単一」「一様」「持続」の意>

(80) 혜영은 웃기만 한다. 【限定】  
(洪思満 1979: 32)

<標識化された格意味を「限定」・「強調」>

(81) 집에만 있으면 늙어 버리는 것 같다. 【限定】  
(洪思満 1979: 37)

<慣用語句の形成>

(82) 무게만 해도 여간이 아닌데 부피까지 저렇게 커서야. 【限定】  
(洪思満 1979: 41)

(78)で示される<「唯一」であることを「限定」>は、そのラベルが示す通り、【限定】を表し、ここまで本稿で用いてきた【限定】と何ら変わらない。(79)は「制限」という分類が成されているが、(78)との違いは‘만’が非数量語につくか、数量語につくかだけであり、やはり【限定】と捉えてよいだろう。(80)は、用言に名詞化語尾‘-기’が接続したものが‘만’が後接することで、用言が表す動作・状態の「単一」、「持続」、「一様」を表すと洪思満(1979)

では述べられる。近世語との違いとして名詞化語尾‘-기’が用いられることが挙げられ、前接要素の拡大こそ見られるが、他の動作・状態を排除して【限定】していると考えることができる。これもまた、(78)、(79)との違いは体言に接続するか、用言の名詞形に接続するかどうかだけであるため、【限定】と捉える。

(81)は格意味を「限定」、「強調」するもので、‘만’に格助詞が前接している。‘만’が格助詞に後接する例も先行研究で扱われた近世語資料では見られなかったが、前接要素が拡大した【限定】用法の一つであると考えられる。(82)は<慣用語句の形成>の一例として挙げられたもので、洪思満(1979)では‘N 만 해도’の他に、‘N 만 V 도’、‘N 만 V 면’、‘N 만 아니면’を慣用語句例として述べているが、いずれも【限定】の意を備えており、【限定】用法の一種と考えて問題ないものと思われる。

ここまで現代語‘만’の【限定】用法を概観した。近世語になって‘만’に本格的に生じた【限定】は現代語では‘만’の基本的な用法の一つであるが、その前節要素は名詞だけでなく用言の名詞形や格助詞へと拡大しており、より幅広く用いられていることがわかる。

#### 4. 3. 4. 【強調】

洪思満(1979)では‘만’の意味分類として、以下の<強調的添意>を挙げている。(83)は‘만’が副詞に後接する例であるが、「少し」という副詞的意味を強調して、「少しだけいれば終わる」と述べている。洪思満(1979: 33)によれば、‘만’が副詞に直接連結する場合は、‘도’と同様に強意限定副詞よりは状態副詞への連結が自由であるという(例：\*가장만, \*아주만, 열심히만, 높이만)。

<強調的添意>

(83) 조금만 있으면 끝이 난다.【強調】

(洪思満 1979: 33)

しかし、これを見ただけでは、(83)の日本語訳に「だけ」が用いられているように、ただ前接副詞の意味が【限定】されて強調されているだけであり、別途、【強調】という用法を設定する必要はないと思われる。

ここで洪思満(1979)で用いられた次の例を見てみる。(84)の a, b では強調及び感嘆の意味機能で‘도’と‘만’がそれぞれ用いられるが、同じ強意的要素である両者は用法・意味において微細な差異を見せている(洪思満 1979: 34)。(84a)では肯定疑問文に対する回答として‘도’が用いられており、‘도’は話者 A と B の間の共感的強調・感嘆である一方で、(84b)では否定疑問文に対する回答として‘만’が用いられており‘만’は相反的強調・感嘆を表す(洪

思満 1979: 34) . このように‘만’は副詞をただ【限定】するのではなく, 話者の聴者に対する相反的なモダリティを表すことが示唆されるため, 本稿では別途, 【強調】という用法を設ける. こうしたモーダルな意味の獲得は, 日本語の「だけ」を扱った際にも見られたものである.

- (84) a. 話者 A : 어때? 빨리 달리지?  
話者 B : 그래. 빨리도 달린다. 【強調】  
b. 話者 A : 어때? 빨리 달리지 않지?  
話者 B : 아니. 빨리만 달린다. 【強調】

(洪思満 1979: 34)

なお洪思満(1979)では‘만’が【強調】を表す用例として, 先の副詞が前接する例の他に, (85)のような用言の副詞的連用語尾に‘만’が後続する例, (86)のような‘야’に‘만’が後続する例を挙げている. 辞書に記述された‘만 14’②の強調用法とはまさにこの用法である.

- (85) 이 서류를 받아만 주십시오. 【強調】

(洪思満 1979: 35)

- (86) 생활을 보장되어야만 능력을 나타낼 수 있다. 【強調】

(洪思満 1979: 36)

#### 4. 3. 5. 【中止】, 【意志・希望】

ここまで現代語‘만’の用法として, 中世語・近世語に見られた【程度】, 【限定】の他に【理由】, 【強調】用法を見てきた. 【理由】用法は【程度】用法, 【強調】用法は【限定】用法から派生したものであり, 現代語‘만’が実に多様に用いられていることが明らかになった. しかし‘만’の用法はこれらに留まらない. さらに別の用法を見ていく.

次のように 17 世紀の文献資料に【中止】用法が見られることを先に確認した. これは指示詞‘그’に‘만’, そして動詞‘하다(하다)’が接続したものであるが, こうした【中止】用法は現代語にも見られる.

- (65) 설워 그만하면 시뵈라 훌 거시오

[再掲: 癸丑日記] (李賢熙 2014: 10)

- (87) 짝사랑을 그만하고 싶다. 【中止】

[국립국어원 2014]

現代語には別の‘만’を用いた【中止】表現がある. 이기갑(2009)は‘만’に



指示冠形詞の‘그’が前接した‘그만’が副詞として用いられる例として(88)を挙げた。<sup>27)</sup>この‘그만’は、先に扱った‘그만하다’という動詞から派生した副詞と考えられる。(88)は<行動の中止・中断>を表すもので、一次的な意味は「その程度だけ食べる」という【限定】であったが、その後、二次的な「それ以上は食べるな」という行動の【中止】が主たる用法に変わったという(이기갑 2009: 46)。【中止】という用法が【限定】から派生したことがうかがえる。

<行動の中止・中断>P→~P

(88) 그만 먹어라. 【中止】

一次的 : 그 정도까지만 먹어라. 【限定】

二次的 : 그 이상은 먹지 말라. 【中止】

(이기갑 2009: 46)

さらに現代語の‘그만’は【意志・希望】というモーダルな意味も獲得する。(89)は、新しい事態「行こう」の前に先行する事態があったと思われるが、‘그만’はその先行事態Pを中断して(~P)新しい事態(Q)を始めようという勧誘する状況で用いられる(이기갑 2009: 47)。この用法には、後続文が命令文と勧誘文、希望や意志を表す叙述や疑問文に限られるという統語的制約があり(이기갑 2009: 47)、【意志・希望】を‘그만’の用法と捉えていいのには異論も予想される。(89)の‘그만’も先行事態の【中止】を表すと考えることもできる。しかし이기갑(2009: 47)では、(89)は(88)と異なり先行事態が明示されないことを挙げており、本稿でも別途の用法と考える。つまり、先の【強調】と同様に、‘그만’の【中止】用法から【意志・希望】というモーダルな用法が派生している。

<先行事態の中断と後行事態への意志・希望>P→~P→Q

(89) 이제 그만 갑시다. (≡이제 그만하고 갑시다.) 【意志・希望】

(이기갑 2009: 46)

#### 4. 3. 6. 【認識態度】

前目で、‘그만’が【意志・希望】というモーダルな意味を獲得したことを述べたが、‘그만’には別のモーダルな意味を備えた例も見られる。(6)の‘그만’は先行行動(P)の結果として後行行動(Q)が成し遂げられたことを表すという(이기갑 2009: 48)。ここでは「長い闘病」という先行行動の結果として、「この世を発ってしまった」という後行事態が起こったことを表現している。



<後行事態に対する話者の否定的な心理>P⇒Q

(6) 오랜 병 끝에 그만 세상을 뜨고 말았다. 【認識態度】

[再掲] (이기갑 2009: 46)

なおこの用法は大きく、二つの場合に分けられ、①話者の判断では、主語が意図しなかったり、予想しなかったりした事態が突発的に起こる場合、②主語の意図が介在する場合がある(이기갑 2009: 48)。(6)は「この世を発つ」という主語が意図しなかった事態を表すため①に該当するが、①も②も後行事態という結果を表すだけに留まらない。この場合は、主語が「この世を発つ」という意図しなかった事態に対する話者の否定的な【認識態度】が表される。(90)は主語の意図が介在する②の場合であるが、他の選択の可能性があったにもかかわらず、「物を投げる」という行動をしてしまったことに対する後悔などの否定的な【認識態度】が表現されている。日本語の「だけ」も【認識態度】を表すことを先に述べたが、「だけ」が前接要素により肯定的、否定的の両方を表し得るのに対して、韓国語は否定的なものに限られるという点が非常に興味深い。

(90) 4개월 된 아이를 가운데 놓고 남편과 목소리를 높여 가며 싸우다  
그만 방 안에 있던 물건들을 마구 집어 던졌습니다. 【認識態度】

(이기갑 2009: 49)

以上のように‘그만’は【中止】、【意志・希望】の他に【認識態度】という用法を獲得した。【中止】を表す論理式が「 $P \rightarrow \sim P$ 」、【意志・希望】が「 $P \rightarrow \sim P \rightarrow Q$ 」、【認識態度】が「 $P \Rightarrow Q$ 」となっていることから、その用法拡張経路は、이기갑(2009)が推定する(91)のように考えるのが最も妥当であると思われる。本稿の術語に置き換えれば、【中止】→【意志・希望】→【認識態度】というように、モーダルな意味を獲得し、さらにその意味範囲が多様になってきている。

(91) ‘그만’の意味拡大 (이기갑 2009)

(a) 状況の指示 (‘그 정도’)

→(b) 先行事態の中止

→(c) 先行事態の中止及び後行事態に対する話者の意志や希望

→(d) 後行事態に対する話者の否定的心理

(이기갑 2009: 51)

#### 4. 3. 7. 【談話標識】

前目、前々目では‘그만’を対象にして、現代語‘만’の用法変化を見てきた。

この‘그만’は標準語であるが，韓国語の地域方言の中には更なる用法変化を見せるものがある。

이기갑(2009)では東南方言‘고마’を取り上げ，標準語には見られない，以下のような用法があることを例示している。<sup>28)</sup>

(92) 인자 부재, 인는 사람드른 우에 여르 기더빠리고. 쏘:까리마 다마:  
해:목꼬 또 우리드른 머 쪼깨~이 꼬 빠수능거 마 마구 고마 이러가:  
거마 다마아서 목꼬 그오도 쏙:가리 빼고 격까리 빼고  
그랍니도. 【認識態度】

(인제 부자, 있는 사람들은 위에 이것을 걸어 버리고. 속가루만  
담아서 해 먹고. 또 우리들은 조금 그 빵는 것 마 마구 그만. 이래  
가지고 그만 담아 와서 먹고. 그것도 속가루 빼고 걸가루 빼고  
그룹니다.)

(이기갑 2009: 54)

(92)では金持ちと貧乏な私たちを対照する内容が含まれているが，金持ちは米粉，唐辛子粉を食べる一方で，貧乏な私たちは少し碾いたものを入れて食べるということである。この時，後行する事態に対して‘고마’を使用して事態の否定的性格を表している(이기갑 2009: 55)。<sup>29)</sup>このような対照の後行項目に対する否定的評価というのは標準語‘그만’には見られなかったものであるが，事態に対する話者の否定的な【認識態度】という点では共通しており，本稿では【認識態度】の一種として捉える。이기갑(2009: 55)は，(6)，(90)のように前件と後件の従属的な意味関係で否定的な【認識態度】を表していたものが，(92)のように前件と後件が対等な意味関係のものにまでそうした用法が拡大したと考えている。

(93) 그으느 마 마 받때이다 마 쎄:르 승우노오모 멘 가매~이 간다 마  
잔다 아~임니까? 세안내에 고마 그으 고마 쌀마 먹꼬. 바버에도  
언저 목꼬. 【談話標識】

(그것을 마 마 받때기에다 마 \*\*심어 놓으면 몇 가마니 갖다 마  
재잡습니까? 겨우내 그만 그것 그만 삶아 먹고, 밥 위에도 얹어  
먹고.)

(이기갑 2009: 58)

(93)は米が不足していた昔の時代に，冬の間さつまいもを茹でて食べたり，あるいはご飯に載せて食べたりするという内容である。ここでは‘고마’が使用されることでさつまいもを食べた多様な方法がはっきりと現れるという(이기갑 2009: 58)。이기갑(2009)ではこうした用法を<事態の強調>と呼

んでいるが、本稿で先ほど見た‘만’の【強調】とは異なる。東南方言‘고마’は話者の心理が反映されるのではなく、ただ起こった事態の動作性などを強調する効果だけを表す(이기갑 2009: 58)。つまり談話を助ける【談話標識】としての機能が強い。そこで本稿ではこうした用法を【談話標識】と捉える。

先に‘그만’が従属的な意味関係で用いられ、後件に対する聴者の否定的な【認識態度】を表す一方で、‘고마’は対等的な意味関係でも用いられ、同様に否定的な【認識態度】を表すことを述べたが、前件が明示されず、さらにその否定性が薄れ、後件をただ強調するようになることで【談話標識】という用法を獲得にするに至ったと考えられる。

(94) 우리느 고마 이리 고마 시미르 영꼬 이리 늑꼬 나서느 고마  
자속드리 아:무건또 하지마라캐. 【談話標識】  
(우리는 그만 이렇게 그만 힘이 없고 이렇게 늑고 나서느 그만  
자식들이 아무것도 하지 말라고 해.)

(이기갑 2009: 63)

(94)では三つの‘고마’が用いられているが、これまでのように【認識態度】が表されているわけでもなければ、動作性を強調しているわけでもない。ただ談話の進行を補助する【談話標識】として機能しているだけである。(93)も【談話標識】としての‘고마’の用例であるが、動作性の強調も起こらず、【談話標識】として機能している面が強い。(93)の‘고마’から動作性の強調が喪失し、【談話標識】機能の面が強化され、(94)のように用いられるようになったと考えられるだろう。

(95) 이 동네는여 며 쪼끼 [그스하모] 고마 [비 쪼매마 안오모] 고마  
모로 몬 승구는기라:. 【談話標識】  
(이 동네는요 뭐 조금만 뭐하면 그만 비 조금만 안 오면 그만 벼를  
못 심는 거야.)

(이기갑 2009: 65)

最後に(95)の例を見る。(95)のように、曖昧な表現をもう少し明らかに具体的な表現に敷衍しようとする時にも‘고마’が用いられる。(95)では「何かあれば」という代用的内容を「雨が降れば」という明確な表現に変えて言う過程で‘고마’が用いられる(이기갑 2009: 65)。これもまた談話の進行を補助しており、【談話標識】の用法の一例である。

ここまで東南方言‘고마’の用法を見てきた。東南方言‘고마’は標準語‘그만’に比べて否定的な【認識態度】の表す範囲が広いばかりではなく、【談話標識】の用法も備えている。先の‘그만’と合わせて、이기갑(2009)では東南方

言‘고마’の変化過程を以下のようにまとめているが、<sup>30)</sup>本稿の術語で言えば、【中止】→【意志・希望】→【認識態度】→【談話標識】という用法変化を辿る。

(96) ‘고마’の意味拡大 (이기갑 2009)

- (a)状況の指示 (‘그 정도’)
- (b)先行事態の中止
- (c)先行事態の中止及び後行事態に対する話者の意志や希望
- (d)後行事態に対する話者の否定的心理
- (e)対照の後行項目に対する否定的評価
- (f)強調
- (g)談話の進行補助 (敷衍)

(이기갑 2009: 66)

なお이기갑(2009)では東南方言‘고마’の【談話標識】用法を扱っているが、標準語‘그만’に関しては【談話標識】用法はこれまで指摘されていない。しかし指示詞‘이’と‘만’が接続した‘이만’は標準語でも次のような用法が見られる。

(97) 설문조사가 성공적으로 끝나길 기대하겠습니다. 그럼 이만.  
심리양!

[윤영현 외 1995 『고려대학교 교양국어 작문자료』]<sup>31)</sup>

(97)の‘이만’はある事態を終える際の定型表現であるが、こうした定型表現には、文の実質的意味の他に、談話進行を補助する【談話標識】としての機能が認められる。

‘만’に前接する指示詞が‘그’と‘이’という違いこそあれども、東南方言と標準語共に【談話標識】の用法を備えている点は非常に興味深い。‘만’を含んだ他表現も対象に入れた、より広範な分析が必要であるが、ここでは【談話標識】を‘만’の用法として把握する。

#### 4. 4. まとめ

本節では韓国語‘만’の用法、用法変化を、先行研究を手がかりに概観した。その様子をまとめると、次の図 2 で表される。<sup>32)</sup>



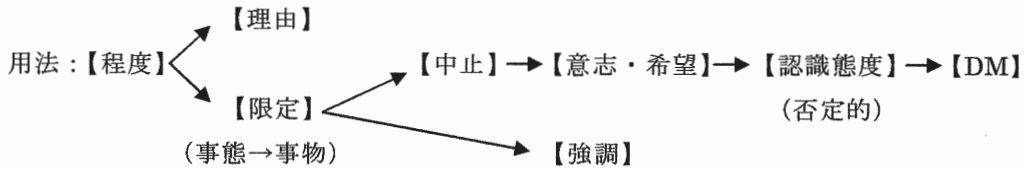


図 2 韓国語‘만’の用法変化

本稿で扱った品詞の変化を見ると、もともと動詞の未来冠形詞形が前接する依存名詞であったものが、名詞に後続する特殊助詞となり、さらに指示冠形詞‘그’, 動詞‘하다’と結びついて、‘그만하다’という動詞として用いられるようになった。さらにそこから派生して‘그만’という副詞が現れた。<sup>33)</sup>日本語「だけ」が語彙形態素から文法形態素への文法化を見せていたのに対して、韓国語の‘만’にそうした明らかな文法化は見られない。

‘만’は中世語では主に【程度】を表していたが、近世語に入り【限定】用法を獲得した。中世語でも【限定】を表す用法が見られるには見られるが、前接要素は用言の未来冠形詞形に限られており、体言に後続する近世語の【限定】用法の‘만’とは異なる。名詞のプロトタイプの意味が事物、用言のプロトタイプの意味が事態であることを考えると、限定要素の事態から事物への拡大様相が示唆される。

現代語に至ると、‘만’の他に【程度】を表す‘만하다’や‘만큼’という形式が現れる。前述の通り、‘만하다’は中世語で名詞ではなく用言の未来冠形詞について【限定】を表す用例が散見されるが、現代語では【程度】を表す。‘만큼’と共に【程度】を表す表現形式の拡大が見られる。また‘만큼’はそのスケール性を生かして、前件と後件の比例関係を表し、【理由】という用法を備える。このように【程度】用法はその表現形式、前接要素共に拡大する。

近世語で【限定】を表すようになった‘만’は現代語では二つの方向に派生する。一方向では、名詞や用言だけでなく副詞などに接続して、相反的強調・感嘆という【強調】用法を獲得する。ここにモーダルな意味の出現がわかる。またもう一方向では、‘만’が指示冠形詞‘그’と結合した‘그만’が、副詞として動詞に前接することで、【中止】の用法を備えるようになった。さらに先行事態を【中止】して新しい事態を始めようとする【意志・希望】を表すようになる。ここでまたモーダルな意味が獲得される。さらに‘그만’は、先行動作に続いて後行事態が成し遂げられることを表すが、後行事態が主語の予期しなかった事態であったり、別の選択肢があったにもかかわらず行ってしまった後悔する事態であったりするという、話者の否定的な【認識態度】という別のモーダルな意味を表す。

標準語‘그만’に見られる用法、用法変化は上の通りだが、東南方言‘고마’では、対等な意味関係にある前件と後件において、後件に対する否定的な【認識態度】を表すばかりではなく、談話の進行を補助する【談話標識】として

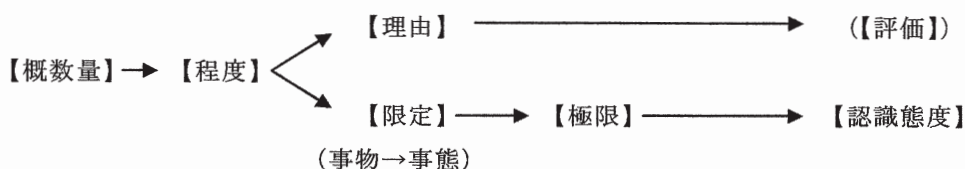
用いられている。この【談話標識】用法は標準語‘이만’にも定型表現として観察される。

以上、韓国語‘만’の用法、用法変化を見てきた。同様に【程度】から【限定】の用法変化を見せる日本語の「だけ」と比較すると、果たしてどのような異同が見えてくるだろうか。簡単にではあるが、次節で比較対照を行う。

## 5. 用法変化の日韓対照

前々節、前節で、それぞれ、日本語「だけ」、韓国語‘만’の用法変化を見てきたが、本節では日韓対照を行う。これまでに見てきた「だけ」と‘만’の用法変化を改めて確認するが、両者の用法変化を、異同に着目して再整理すると、次の図3のようになる。

・日本語「だけ」



・韓国語‘만’

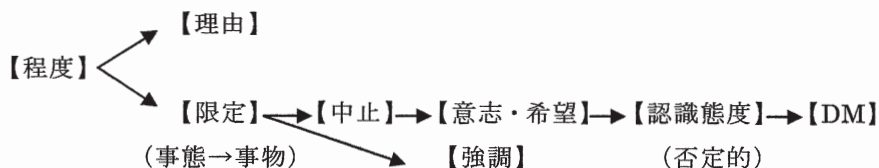


図3 日本語「だけ」と韓国語‘만’の用法変化

日本語「だけ」、韓国語‘만’共に【程度】、【限定】という用法を備え、【程度】から【限定】という用法変化を見せている点は先行研究でも指摘される通りだが、他に【程度】から【理由】が派生している点、【認識態度】というモーダルな意味用法を獲得している点で共通している。

しかし「だけ」の【認識態度】が前接要素により肯定的・否定的の両面を表し得るのに対して、‘만’が表す【認識態度】は否定的なものに限られる。さらに他の用法についても日韓で違いが見えることが上図3より確認される。

本稿では先行研究の引用を中心に、日本語の「だけ」と韓国語の‘만’の用法変化を記述することを目的としているため、異同の原因については別稿に譲るが、記述研究の他に理論研究の側面からの分析も望まれる<sup>34)</sup>。

## 6. おわりに

本稿では、日本語「だけ」と韓国語‘만’における用法変化の日韓対照研究を行った。主に先行研究を手がかりにして、通時的、共時的の両観点から分析した結果、両形式の用法変化に見られる異同が明らかになった。

しかし本稿では数多くの課題も残った。代表的なものを挙げると以下の通りである。

- ①本研究は先行研究の引用に大きく依存しているが、二言語の表現形式を通時的、共時的に俯瞰することを試みたため、先行研究を無批判に受け入れてしまった部分も少なくなく、考察にも不十分な点が残る。また先行研究や本稿では触れられなかった「だけ」、‘만’の用法も存在し得る。<sup>35)</sup>本稿で整理した用法変化は都合のいい青写真に過ぎない可能性もあり、今後、分析を深めていく上で詳細かつ批判的な検討、そして分析対象の拡大も必要になる。
- ②本稿で紹介した例文も、先行研究から引用したものと作例に留まった。実際にコーパスを用いて用例を収集することで、「だけ」と‘만’それぞれの前接、後接要素との共起関係を定量的に明らかにすることができ、本稿で考察した用法変化を検討する一助になると思われる。
- ③「だけ」と異なり、‘만’に関しては 14 世紀以前の用法については触れることができなかった。ハングル創製前の漢文資料では‘만’はどのように用いられていたのかを調べる必要がある。調査結果によっては本稿で整理した用法変化は修正を余儀なくされる。
- ④本稿では「だけ」と‘만’という二つの表現の対照研究に留まったが、他に類義表現として、日本語の「ばかり」「しか」、韓国語の‘뿐’, ‘밖에’などが挙げられる。言語の意味変化には類義表現との相互関係も大きく影響すると考えらる。逆説的ではあるが、今後、類義表現も分析の対象とすることで、「だけ」と‘만’に関する知見を更に深められるものと考ええる。
- ⑤「だけ」と‘만’は【程度】から【限定】用法の派生が見られるが、英語や中国語ではそうした用法変化は見られない。なぜ日韓でそうした変化が生じたのか。あるいはそうした変化は他の言語でも生じ得るのだろうか。日韓対照研究だけではなく、対象言語を拡大した類型論的視座も求められる。

こうした課題を克服していくことにより、日本語「だけ」と韓国語‘만’の用法変化に関する個別研究だけでなく、言語の意味用法変化研究に大きな貢献が成されることが期待される。



《註》

- 1) 本稿で用いる用法の名称は【】内に記す。また先行研究で言及される用法の名称を主に<>内で表現することにより区別を設ける。
- 2) 「断定」を表す「だ」を助動詞として扱ってよいのかについては異論が予想されるが、本稿の主な分析対象ではないため、暫定的に助動詞として捉える。
- 3) ただし‘만’と同様に【限定】用法を備える‘뿐’の場合は、「だけ」同様に事態を限定し、指定詞‘이다’と結びつく。しかし【認識態度】を表す用法はやはりまだ確立されていないようで、以下の文も(5)ほどは【認識態度】を表さず、【許容】を表す‘~면 되다’を用いる方が自然だという(韓国人母語話者への聞き取りによる)。モダリティの一般的な区分の一つに拘束的なもの(deontic)と認識的なもの(epistemic)に二分する方法があるが、韓国語では前者の【許容】、日本語では後者の【認識態度】で表される点も興味深い。

(5) …?나머지는 결과를 기다릴 뿐이다?기다리기 만할 뿐이다. 【認識態度】

(5) …나머지는 결과를 기다리면 된다. 【許容】 (【認識態度】)

また日本語「ばかり」も「だけ」, ‘만’と同様に【程度】、【限定】を表す。さらに後述の【概数量】、【理由】用法も備え、「だけ」との共通点が数多い。また「ばかり」の語源は「計り」と考えられており(築島 1964: 152), その通時的用法変化も「だけ」同様に【概数量】→【程度】→【限定】と推測される。

- ・手に関する慣用句は驚くばかりに発達している。【程度】
- ・この品は値段ばかり高く、質は低い。【限定】
- ・1週間ばかり休暇を取ってハワイに行きたい。【概数量】
- ・私が余計なことをしたばかりに、みなに迷惑をかけてしまった。【理由】

(以上、日本語記述文法研究会編 2009: 62-71)

しかし「ばかり」には「だけ」, ‘만’と異なり【認識態度】を表す用法はない。本稿は共に【認識態度】というモーダルな用法を獲得している「だけ」, ‘만’のみを対照し、「ばかり」や‘뿐’を始めとする類義表現については日韓共にあまり触れない。最終節でも課題として述べる。なお「ばかり」には下記のようなアスペクト的用法が見られる。

- ・あの留学生は日本に来たばかりだ。

(日本語記述文法研究会編 2009: 70)

- 4) とりたて助詞は他に、とりたて詞、取り立て助詞、副助詞等の名称で呼ばれるが、本稿では「とりたて助詞」で統一する。
- 5) 本稿の「だけ」の通時的用法変化に関する分析も宮地(2010)に負うところが多く、当該論考については、次節で詳しく扱う。
- 6) こうした洪思滿(1973, 1979)の一連の研究については、4節で詳しく見る。
- 7) なお김지현(2011)では【程度】、【限定】の他に<縮小制限>という用法を設け、排他的の強弱や前接要素の確実性必要の有無から、日本語の「だけ」は【限定】用法の側面が、韓国語の‘만’は<縮小制限>用法の側面が強いと述べられている。ただし他の先行研究では【限定】と<縮小制限>の区別がほとんど成されておらず、その通時的関連性も明らかになっていないところが大きいので、本稿では共に【限定】用法として扱う。
- 8) 本項から4項までの内容は主に宮地(2010)を要約したものである。
- 9) なお宮地(2010: 426)によると修飾語をとらない例は近世以降も和歌・俳句、高僧・役者などの人物のみを対象とし、歌論・俳論・役者論といった特定の場面に限られる。

- ・此詩を吟ずれば、心がたけたかく成りて、よき哥の詠まるゝ也云々。【概数量】

[正徹物語] (宮地 2010: 426)

- 10) 近藤他(2012)では「事物」を「モノ・ヒト」, 「事態」を「行為」と述べている。前者



は全く同義のものと考えて問題ないが、後者については一般的に意味が異なるものと考えられる。近藤他(2012)では「だけだ」に前接する用言を動詞に限定するため、「行為」という術語を用いているが、本稿ではそれを形容詞も含めた用言全般に拡大していくため、「行為」も含めた「事態」という広い概念を利用する。

- 11) 【評価】も『話し手が事態をどのように認識しているか』を表すという点では【認識態度】と共通しており、両者は重なる部分が少なくない。しかし【認識態度】が話し手の主観によるところが大きいのに対して、(22), (23), (25), (29)にあるように【評価】はその基準が言明されており、客観性が【認識態度】に比べて高い。そのため、本稿では両者に一定の区別を設ける。
- 12) ただし分裂文の場合は、感じられる不足感の度合いに差があると安部(1999: 35)では述べられる。以下の例の場合は、単に「読んだ本」を述べただけで、不足感のような特別のニュアンスは感じられないように思われるという。

・X: 夏目漱石の本は何を読んだ?

Y: 読んだのは『坊っちゃん』だけだ。【限定】【認識態度】

(安部 1999: 35)

- 13) 【評価】用法を持つ表現として、「だけに」、「だけあって」を扱ったが、「だけに」の【評価】は語用論的に発生するものであることは先に触れた。また「だけあって」も、本来の形は「だけのことはある」であり、特立のとりたて助詞「は」の働きが大きいことを述べた。そのため、【評価】は「だけ」そのものによる用法ではないとも考えられる。しかし一方で、以下のように類義表現である「ばかり」を用いた「ばかりに」「ばかりあって」は【評価】用法は見られず、やはり「だけ」そのものも【評価】用法の派生に関わっていると言えそうである。【評価】を「だけ」の用法と考えていかはまだ議論の余地が残るため、図1では括弧付きで【評価】用法を提示する。

(22') \*5年間も留学していたばかりあって、佐藤の英語力はたいしたものだ。【評価】

(25') \*さすがに郷土史をやっていたらしゃるばかりに詳しいですね【評価】

なお、中里(1995)は「ばかりに」の【理由】用法に言及しているが、「だけに」の「だけ」が【程度】の意味を表すのに対して、「ばかり」は【理由】の【限定】を表すという相違点があることを指摘している。この相違点が【評価】用法の有無につながっていると考えることもできる。

- 14) ③の具体例としては以下の例文が挙げられている。

・열 장의 복권 중에서 하나만 당첨되어도 바랄 것이 없다。【限定】

[국립국어원 2014]

例文からもわかるように、この文は本来「一つだけでも」という【限定】を表していたものが、語用論的に「話者が期待する最後の善」を表すようになったと考えるほうが自然である。

- 15) 他の術語として補助詞、補助助詞がある。また依存名詞としての‘만’の用法や助詞②については後述。
- 16) ‘만’と‘하다’, ‘묻다’, ‘크다’, ‘말다’が合成した形式は、日本語の「だけに」、「だけのことはあって」、「だけだ」などの「だけ」諸形式と比較した場合、要素間の密着度は低く、文法化は起こっていないか、あるいはその度合いが低いものと考えられる。そのため、合成によって派生した<比較>という用法を‘만’の用法変化には含めない。次に述べる‘너기다’も同様である。
- 17) 他に中世語の‘만’が【程度】を表す形式として下記の‘NP ㅁ NP’が挙げられる。

・무되 술윗 바희ㅁ 靑蓮花 | 나머 【程度】

[月印釋譜] (李賢熙 2014: 2)

- 18) ただし고영근(2010)では【限定】ではなく<単独>という術語が用いられている. 安秉禧・李光鎬(1990)でも同様である.
- 19) 李賢熙(2014)によれば ‘VP-ㄴ 만 ㄱ-’が【程度】を表す例が中世語にも下記のように見られるが, 【限定】に比べてかなり少ないという.

· 잔에 브서 돕고 득서 ㅎ야 브서 머기고 사랴미 五里에 갈 만 ㅎ야 【程度】  
[救急方諺解] (李賢熙 2014: 5)

しかし近世語になると【程度】を表す用例が増加し, 現代語と大きな違いはなくなる.

· 마르니는 족히 뼈 몸을 둘러 서랴 덜 만 호믈 取ㅎ고 【程度】  
[家禮諺解] (李賢熙 2014: 9)

このような‘VP-ㄴ 만 ㄱ-’の【限定】から【程度】への意味拡張は, ‘만’の【程度】から【限定】への意味拡張と対照的である. 中世語では‘만’が【程度】を表し, ‘VP-ㄴ 만 ㄱ-’が【限定】を表すという, 所謂「不一致」な状態であったが, ‘만’が【程度】の他に【限定】の用法も獲得することで, ‘VP-ㄴ 만 ㄱ-’にも‘만’同様に【限定】の他に【程度】の用法を持つと類推されたことによるものではないかと考えられる. なお【程度】の‘VP-ㄴ 만 ㄱ-’構成の勢力が大きくなり, 【限定】の‘VP-ㄴ 만 ㄱ-’構成はその重義性を回避するため, ‘VP-ㄴ 만 ㅎ ㅅㅅㅅ미-’構成に変貌して現れるようになった(李賢熙 2014: 9).

· 음식은 주린 거슬 최을 만 ㅎ ㅅㅅㅅ미라 【限定】  
[女訓諺解] (李賢熙 2014: 9)

20) 【中止】用法については後述.

21) 문병열(2009:140)では「個体限定」, 「事件限定」を次のように述べている.

- 個体限定…「唯一限定」, 「姉妹項の排除」
- 事件限定…「事件 X が起きれば, そしてその時にのみ」, 「姉妹項の削除」

事件の限定は仮定を表す連結語尾‘-면’が接続した‘N만 V면’の形式で表されるものであり, 本稿で扱う事物の【限定】, 事態の【限定】とは次元が異なる分類であるため, 紹介のみに留め, 本稿ではこれ以上は扱わない.

22) 【理由】用法については次目で扱う.

23) 정연희(2012)は 15 世紀から現在に至る‘-을 만하다’の用法の通時的変遷を分析し, 【程度】から<可能>, <価値>へと拡張することを述べた. ただし<可能>用法として挙げた次の例は【程度】としても解釈できると述べられている.

· 送使너끼 ㅎ는 일을 보면 반딕 당이라도 홀만ㅎ도다 【程度】  
[隣語大方] (정연희 2012: 273)

また<価値>用法の具体例についても特定副詞との共起を指摘しており, <価値>は【程度】の二次的意味であることを示している.

· 소상과 단청을 대 새로 등슈ㅎ엿는디라 마중 불 만ㅎ디라 가운데  
[乙丙燕行録] (정연희 2012: 274)

このことから‘만하다’の用法を【程度】と考えてもいいと思われる. なお정연희(2012)では【程度】から<可能>, <価値>への用法変化の原因として, 語用論的推論, 抽象化と隠喩, 主観化, 形態的变化を挙げている.

24) 注 19 を参照されたい.

25) ただし‘만큼’には次のような【限定】用法も見られ, ここからも【程度】と【限定】の連続性を確認できる.

・ 이번만큼은 꼭 이겨야 한다.

(李賢熙 2014: 1)

- 26) 松尾(2000) は‘만큼’を依存名詞として捉え、その特性を形態論、意味論の観点から分析した。意味論的分析の結果、用言では「程度、比例、理由」、体言では「程度、比例、比較、限定」の各意味が実現されると述べた。ただしここまでの議論でも出てきたように、本稿では「比例、比較」は【程度】に含まれるものと考え、‘만큼’の用法を【程度】と【理由】の二つのみに設定する。
- 27) 이기갑(2009)は東南方言‘고마’の分析を主眼に置いているため、‘만’に指示冠形詞‘그’が前接した‘그만’のみを扱っているが、他の指示冠形詞‘이’, ‘저’が接続した‘이만’, ‘저만’も存在する。これらの意味用法は一致せず、相違点も少なくないが、本稿は‘만’の用法変化を概観することを目的としているため、原則的に、‘만’からの用法変化が比較的明らかな‘그만’のみを扱う。なお李賢熙(2014)では‘이만’, ‘그만’, ‘저만’の三形式について少考を加えている。
- 28) 東南方言‘고마’は‘그마’, ‘거마’など多様な姿で現れるが、標準語と異なり、語末の子音‘ㄴ’が脱落しているという点が共通している。이기갑(2009)では‘고마’を代表形にして分析しているが、本稿もこれに従う。
- 29) こうした対照項目に対する否定的評価を表す‘고마’の中には、対照すべき前件が明示されなかったり、文脈や状況から対照項を推論することさえ不可能であったりするものもあるという。詳細は이기갑(2009)を参照のこと。またここでの<否定的評価>は本稿の【評価】と異なり、その明確な基準が言明されていないため、別個のものとする。
- 30) 東南方言には‘고마’がさらに縮約された‘마’という表現があるが、【談話標識】の用法を持つという。詳細は이기갑(2009)を参照されたい。
- 31) 국립국어원 언어정보나눔터(<http://ithub.korean.go.kr/>)における現代文語コーパスの検索結果である。2014年4月9日閲覧。
- 32) 紙幅の都合上、図表上では【談話標識】をその英訳 Discourse Marker の頭文字をとって【DM】と表記する。
- 33) 韓国語‘만’から派生する‘그만하다’には動詞だけでなく以下のような【程度】を表す形容詞もある。

・ 그만한 양이면 우리 식구 모두 먹어도 충분하겠다. 【程度】

[국립국어원 2014]

本稿では【程度】や【限定】などの用法変化を見ることを目的としているため、品詞変化について深く立ち入ることはしない。今後の課題である。

- 34) 日本語「だけ」と韓国語‘만’の用法変化を説明する理論研究として(間)主観化理論が考えられる。Traugott(1995)は(間)主観化を以下のように説明している。

・ (間)主観化 ((Inter)subjectification; Traugott1995)

- a. 「内容」を表す意味が話し手の主観的な信念状態・態度を表すようになる。(主観化)
- b. 話し手の主観的な信念状態・態度を表す意味が聞き手指向的な意味を表すようになる。(間主観化)

(Traugott(1995: 31), 澤田編(2011: xxxii))

(a)が主観化の説明であるが、「話し手の主観的な信念状態・態度」というのはモダリティのことに他ならない。ここまで見てきた通り、「だけ」は【評価】、‘만’は【強調】、【意志・希望】という用法を備えるようになった。具体的な用法変化こそ異なるものの、【評価】、【強調】、【意志・希望】共にモーダルな意味を表している。つまり、【認識態度】や【評価】、【意志・希望】というモーダルな意味の獲得は、主観化の方向に従っていると言える。こうした主観化というのは、類型論的研究から汎言語的に見られることが指摘されており、日本語「だけ」と韓国語‘만’もその例外ではないということが示唆され

る。

また(b)の間主観化の説明にもあるように、主観化が進行すると、モーダルな意味が聞き手指向的な意味を表すようになる間主観化の傾向が見える。韓国語の‘만’には、談話の進行を補助する【談話標識】という聞き手指向的な意味を備えており、間主観化が起こっていると言えるかもしれない。

(間)主観化理論を「だけ」と‘만’の用法変化に適用できるかどうかには、より精緻な検討が必要であり、稿を改めて論じたいと考える。

- 35) 李賢熙(2014)は‘X 만하다’の通時的文法研究を志向し、その表現形式、意味が多岐に渡ることから、困難さを指摘している。本稿では扱えなかったが、李賢熙(2014)で言及された‘만’に関連する表現として、‘웬만하다’, ‘암만하다’, ‘그만이다’, ‘그만두다’等が挙げられる。

#### 《参考文献》

##### 〈研究図書・論文類〉

安倍朋世(1999)「ダケの位置と限定のあり方」『日本語科学』6

奥津敬一郎(1986)「形式副詞」奥津敬一郎他所収

奥津敬一郎・沼田善子・杉本武(1986)『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

金水敏・工藤真由美・沼田善子(2000)『時・否定と取り立て』岩波書店

近藤安月子(2008)『日本語学入門』研究社

近藤安月子・姫野伴子(2012)『日本語文法の論点 43—「日本語らしさ」のナゾが氷解する—』研究社

澤田美恵子(2007)『現代日本語における「とりたて助詞」の研究』くろしお出版

澤田治美編(2011)『ひつじ意味論講座 5 主観性と主体性』ひつじ書房

田島毓堂編(2010)『日本語学最前線』和泉書院

趙愛淑(2006)『現代日本語における限定のとりたて詞の研究』제이앤씨

築島裕(1964)『国語学』東京大学出版会

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味 第Ⅲ巻』大修館書店

中里理子(1995)「「だけに」「ばかりに」の接続助詞的用法」『言語文化と日本語教育』9

日本語記述文法研究会編(2008)『現代日本語文法 6 第 11 部複文』くろしお出版

日本語記述文法研究会編(2009)『現代日本語文法 5 第 9 部とりたて 第 10 部主題』くろしお出版

丹羽哲也(1992)「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44

沼田善子(1986)「とりたて詞」奥津敬一郎他所収

沼田善子(2000)「とりたて」金水敏他所収

沼田善子(2009)『現代日本語とりたて詞の研究』ひつじ書房

沼田善子・野田尚史編(2003)『日本語のとりたて—現代語と歴史的変化・地理的変異—』くろしお出版

洪思満(1983)「韓国語の特殊助詞と日本語の副助詞との対照研究 (IV) — {man} と {だ



け} の意味機能対比一』『言語研究』3

益岡隆志(2011)「原因理由を表わすダケニとダケアッテの分化」『日本語・日本学研究』1

松尾勇(2006)「異存名詞만큼について」『朝鮮学報』176・177

宮地朝子(2003)「限定のとりたての歴史的変化—中世以降—」沼田善子他所収

宮地朝子(2010)「ダケの歴史的変化再考—名詞の形式化・文法化として—」田島統堂編所収

고영근(2010)『제 3 판 표준 중세국어문법』집문당

김지현(2011)「현대 한국어 특수조사 {만}의 의미와 용법 재고 -일본어 {dake}와의 대조를 통해-」『日語日文學研究』83

문병열(2009)「중세국어 한정 보조사의 의미·기능과 그 변화 양상」『국어학』54

박진호(1995)「현대국어 ‘만’, ‘뿐’, ‘따름’과 중세국어 ‘만’, ‘뿐’, ‘쓰름’의 문법적 지위에 대하여」『국어학논집』2 (고영근 2010 より再引用)

安秉禧・李光鎬(1990)『中世國語文法論』學研社

이기갑(2009)「동남방언의 담화표지 ‘고마」『우리말연구』25

李吉遠・金末淑(2000)「日・韓兩言語「だけ」「ばかり」と「만」「뿐」에 관한 對照研究」『日本學報』45

李賢熙(1994)『中世國語 構文研究』新丘文化社

李賢熙(2014)「‘X 만하다’ 構成의 通時的 文法論」第 239 回朝鮮語研究会發表資料

정연희(2012)「한국어 가치 표현 ‘-을 만하다’의 문법화 연구」『言語와 言語學』55

洪思滿(1973)「語辭 「-만」에 對한 意味機能의 史的研究」『語文論叢』8

洪思滿(1979)「助詞 「-만」의 意味分析」『東洋文化研究』6

Dieten, Stein. and Wright, Susan. (eds.) *Subjectivity and Subjectivization*, Cambridge University Press.

Traugott, C. Elizabeth. (1995) "Subjectification in Grammaticalization" In Dieten et al. (eds.).

〈辭書類〉

日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編(2000-2002)『日本国語大辞典 第二版』小学館

국립국어원(2014)『표준국어대사전 인터넷판』국립국어원 (2014年3月12日閲覧)

《付記》

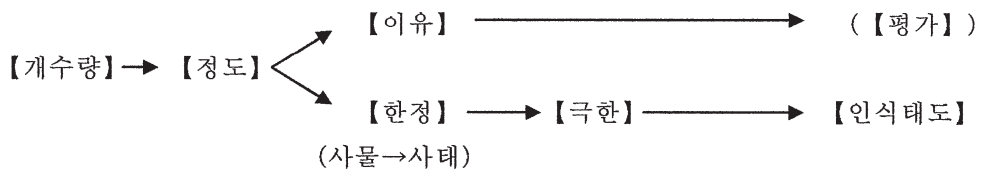
本稿を作成するにあたり、大韓民国ソウル国立大学校教授・東京大学特任教授(2013年度)の李賢熙先生からは数多くの先行研究とご助言を受け賜わった。指導の義務がない中での身に余るご指導に、この場を借りて感謝申し上げたい。もちろん本稿における不備は全て筆者に帰するものである。

‘dake’와 ‘만’에 보이는 용법 변화의 한일 대조 연구  
—기술 연구—

新井保裕  
東京大学

본고에서는 일본어 ‘dake’와 한국어 ‘만’에 있어서의 용법 변화를 기술 연구 관점에서 바라보며 한일 양 언어간의 대조 연구를 시도하였다. 주로 선행연구를 중심으로 통시적, 공시적 두 관점에서 분석한 결과, 두 형식이 비슷한 용법을 가지고 있다 하더라도 그 용법 변화에 있어서 차이가 밝혀졌다. 하지만 이동[異同]의 원인을 밝히기 위해서는 기술 연구뿐만 아니라 이론 연구 측면에서의 분석도 요구된다.

• 일본어 ‘dake’



• 한국어 ‘만’

